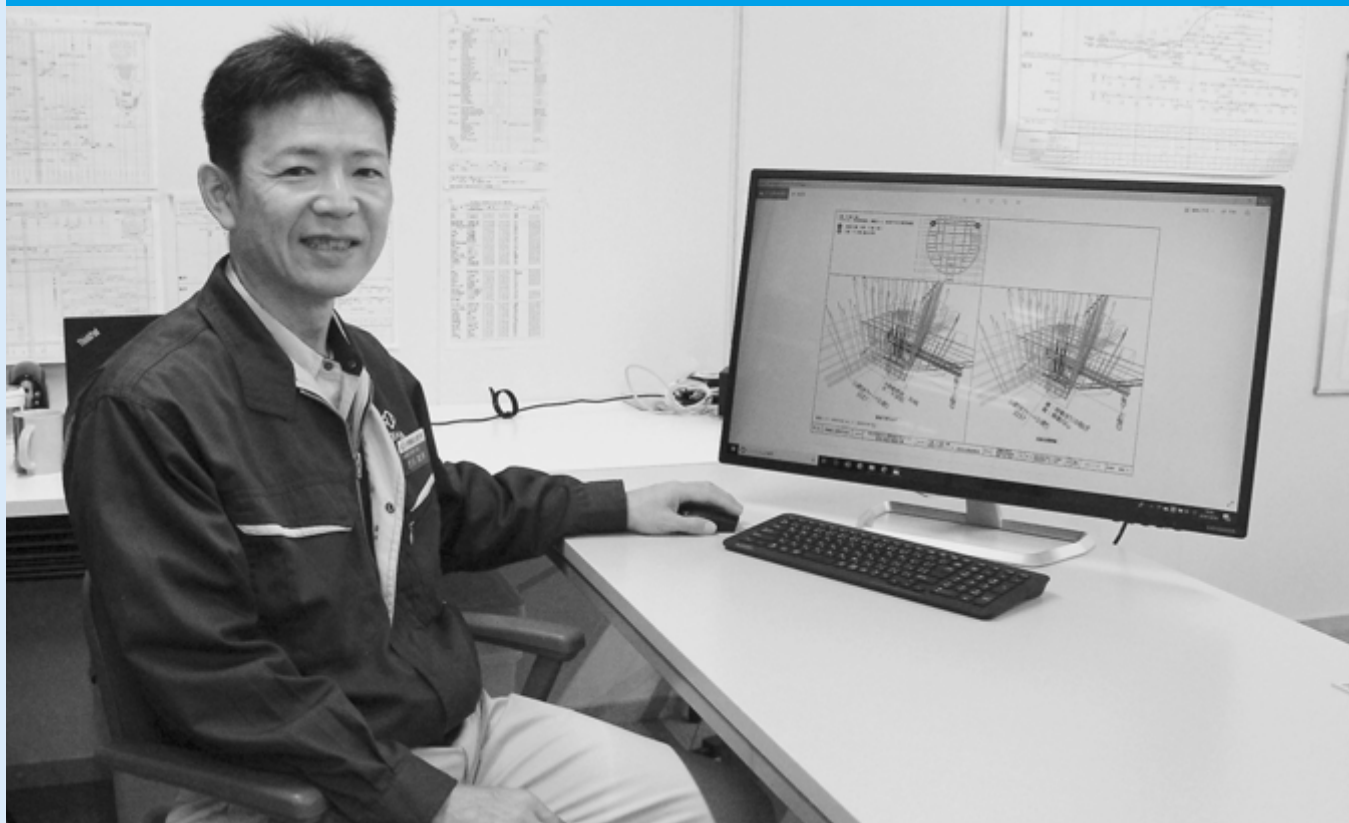




現場事務所で体験交流ホールの図面を見せてくれた古川さん

2020年4月24日、白老町にウポポイ（民族共生象徴空間）が誕生します。ポロト湖を臨む自然豊かな空間の中に、国立アイヌ民族博物館や体験学習館などのほか、アイヌ古式舞踊やムックリ演奏などを楽しめる体験交流ホールが整備されます。

この体験交流ホールの建設現場で、毎日100人弱の職人たちをまとめているのが、伊藤組土建(株)の古川和洋さんです。

## 経験と学びが求められるマネジメント力

札幌市出身の古川さん。1994年に北海学園大学建築学科を卒業し、伊藤組土建(株)に入社しました。

地元の札幌を拠点に仕事をしたいと考えていた古川さん。建設業に就職した先輩たちの声も聞いて、就職先を検討したと言います。卒業の1年前は「札幌駅南口土地区画整理事業」の都市計画が決定し、札幌駅南口の再開発計画が動き出したころ。伊藤組土建の本社はすぐそばにあり、「大きな仕事にかかわれるのでは」と期待が膨らんだそうです。

名建築と言われた旧札幌駅、北海道庁旧本庁舎（道庁赤レンガ）復元、北海道百年記念塔など、道内の歴史的な建築物や技術力が求められる工事を数多く手がけてきた同社の歴史も大きな魅力だったのでしょう。

学生時代は、計画づくりや設計にも興味があったという古川さん。しかし「基本は現場にある」と考え、まずは施工を経験し、数年後に計画や設計の分野に転身することを考えていたそうです。

ところが、仕事の難しさを克服していくうちに現場の魅力に引き込まれていくようになりました。「短い現場でも半年、中には2、3年の現場もあります。覚えることがたくさんあって、それを追及して、今までやってきた感じです。負けず嫌いなんです」と笑います。

「計画をして、指示を出して、確認をする。現場のマネジメントは、最初から最後まで見通さなければうまくいきません。そのためには経験と勉強が必要で、一朝一夕には身につけませんからね」と、真摯に仕事に向き合ってきた時間を振り返ります。



## 現場の楽しさを実感した“さいたま新都心ビル”

道内主要施設の現場を担ってきた伊藤組土建だけあって、古川さんがこれまで担当した現場も札幌健康づくりセンター（旧ペアーレ札幌）、札幌駅地下街、札幌商工会議所、札幌大学学生会館、共和町の緊急事態応急対策等拠点施設（北海道原子力防災センター）、地下鉄自衛隊前駅など、名前を聞けばわかる有名どころばかりです。

中でも思い出に残っているのが、2000～2002年に埼玉県与野市（現さいたま市）で手がけた明治生命さいたま新都心ビル（現明治安田生命さいたま新都心ビル）の新築工事。高さ168m、地上35階、塔屋2階、地下3階の超高層ビルで、古川さんにとっては首都圏初の現場でした。企業体のメンバーとして伊藤組土建からたった一人だけ派遣され、「技術的に大きな刺激を受けた」と言います。

当時、札幌市内にはまだ超高層ビルがなく、最先端の技術と優秀なスタッフ、毎日500人以上の作業員が働く現場は、「組織的に現場を束ねるマネジメント力の重要性を実感した」そうです。また、建設地は東京都心機能の「新都心」を意図して、大規模な再開発が行われた一帯にあり、再開発大プロジェクトにかかわったことは貴重な経験になりました。

毎日少しずつ鉄骨が組み立てられ上棟し、その屋上から見た富士山は、今も忘れられないそうで、今後も施工現場で頑張っていく転機になった現場だったと言います。

## 世界に発信する施設に携わる誇り

2018年9月に着工したウポポイの体験交流ホールは、ガラス張りになったステージの奥から、ポロト湖とチセ（家）が望め、アイヌの暮らしの風景を背に、舞台が展開されることになります。

周辺の景観に調和するように、緩やかな曲線を生かしたシルエットが特徴の建物ですが、建築には高度な技術力が求められます。「3次元ドーム形状で品質管理が非常に難しい」と古川さん。曲線や3次元とは、柱と梁が微妙な角度の変化の中でつなぎ目が構成され

るため、特に鉄骨の精度管理には苦労しました。構造物の形状を3次元で立体的に表現した情報に加え、建物の属性情報を合わせ持つ建物情報モデル（BIM）を駆使して、鉄筋と鉄骨アンカーボルトの干渉のほか、鉄骨図に3次元キャドを使用し、きちんと納まっているかを確認。空調設備にも干渉がないかなど、繊細な管理が求められました。構造物が非常に複雑なため、「職人さんにイメージを持ってもらうことが重要」と、事前に何度も打ち合わせをしてイメージを共有しました。

「北海道で活動する一技術者として、世界に発信する施設の現場代理人を務めたことは、誇りになります。大きなやりがいを感じましたが、それはこの現場にかかわった職人さんたちも同じ思いだと思います」。

伊藤組土建では、年に一度、優秀な職人を表彰する制度があります。発注者が元請けを表彰する機会がありますが、下請けである職人の人たちを表彰することはないため、そうした仕組みがあれば職人たちのやりがいにつながり、人手不足にも寄与するのではないかと考えているそうです。

「建設業の仕事は、ベターはあってもベストはありません。よりベターな選択をするためには多くの経験と知識が必要で、その判断には大きな責任が伴います。それがこの仕事の難しさ」と古川さん。「計画、設計、施工の中で下流に当たる施工は、上流の計画や設計から多くの情報と技術が集まってきます。多くの技術と情報、労働力、資材、資金を駆使して効率的に建物を造り出していくのが、われわれゼネコンの技術者の仕事です。自分で計画をつくって、計画どおりに管理していくこと、多くの技術にふれられることは、この仕事の大きな醍醐味です」と、長年追及してきた現場の魅力語り。そして、「現場は最先端」という言葉どおり、その難しさと楽しさをウポポイの現場でも実感しているようでした。